

を占めています。とりわけ「農業」だけで言う、総農家数は1,068戸に対し農業就業人口は1,702人、耕地面積は3,170畝です。かつては種子島家の城下町として栄え、現在では熊毛支庁や国の出先機関が置かれており、種子島及び熊毛地区の政治・経済の中心を担っています。西之表出身の有名人と言えば、現在放送中の大河ドラマ「西郷どん」の中でよく出てくる「川口雪蓬」や朝日新聞に連日掲載される「天声人語」の生みの親「西村天囚」などを輩出しています。

全体的に南北に細長く最も高い所で282mと島全体が平坦な地形です。この平坦地形に加え温暖な気候に恵まれている為、農業が非常に盛んです。代表的な作物と言えば、超早場米として知られる水稻、「安納いも」をはじめとするイモ類、種子島の基幹作物であるサトウキビ栽培、これに加え価格高騰が著しい畜産業も盛んです。その他にも、古田校区番屋ヶ峰集落に静岡から移住し生産が始まったと言われるお茶の栽培や上西校区大花里集落にある清水園芸では、フリー

ジアの球根生産において日本一の生産量を更新しています。この様に、自然環境が整った種子島は、農業の為にある「宝の島」と言っても過言ではないと思います。

そんな「宝の島」西之表市で農業を支えているのが、我々農協青壮年部西之表支部です。現在では地道な勧誘と青壮年部活動への理解が実を結び、5年前の14

名から22名まで盟友が増えました。さらに平均年齢も52歳から42歳と約10歳若返ったのです。この結果は、今まで取り組んできた自分達の組織活動を分析し、時間をかけて話し合い、今の自分達に合った最善の方法を導きだした事にあると思います。

私は自分で暴走し計画倒れになった後、前部長の言葉を思い出し当時どのような活動をしてなぜ失敗したのか気になり、盟友の記憶を頼りに調べる事にしました。今から約15年前、「食育」の先駆けだと思いましたが、農家から畑を借り、草を払い、畑を耕し、畝をたて、芋の植え付け、様々な管理作業行い、最終的に幼稚園児らと青壮年部と一緒に芋掘りを行いました。掘り取った芋はその場で焼き芋として食べ、余った芋は園児の父兄に持って帰ってもらいました。当時としては画期的で園児や父兄には大好評でしたが、作地料の問題が発生した事、部員に対してこの食育活動に「強制参加」を求めた結果、繁忙期に家を空ける事をためらう盟友が続出し、わずか2年で頓挫したのです。食育を行う目的と重要性が部員に伝わっていなかった事、さらに、強制参加に対しての反発が原因だとわかりました。当時の部長はその時の事を振り返り「盟友の意識が変わらない事には何もできない、何も変わらない」と言い、私に対してのあの発言は、自分と同じ失敗をして欲しくないが為に私の事を思ったの発言だったのでした。

原因を究明した後、我々は今後の活動について話し合いました。行事がある度に自

分達の考えを出し合い、協議を2年間かけて行いました。じっくり深く協議する事により、具体的なしつかりとした方向性が見えてきました。時代の流れに振り回されて新しいものを追求して行くのではなく、自分達の体力を考え、まず伝統的に行われてきた事を残すという決断をしました。毎年12月に行われるJAまつりに出店し「芋餅」の作成、販売を絶やさないことでした。このJAまつりの出店は昨年で18回目となり、祭りの盛り上げと共に島民に対して自分達の青壮年部のPRする絶好の場なのです。しかし「芋餅」の作成には大変な労力と手間暇をかけます。祭り前日朝7時に集合し、みんなで200キロのサツマイモの皮をむき、順番に芋を蒸します。同時に18キロのモチ米も蒸して餅をつき、蒸しあがったサツマイモを混ぜ合わせます。この時しつかり芋をつぶさないと舌触りが悪くなり、不評の原因となります。出来あがった芋餅はすぐさま細かく切って丸め、パック詰めをします。これを効率よく8回ほど繰り返し、約700パックの芋餅を作成します。すべての作業が終了したところには、5時をまわることもしづらいです。従来の強制参加ではなく、自由参加にした事で、多くの盟友が気軽に参加するようになりました。農作業とは違い慣れない作業の中にも自分の持ち場、持ち場で「ひとつのものの、そして最高のものを作り上げる」という皆の想いが1つになった時、最高の商品になり

ます。そんなみんなの気持ちの入った芋餅は常に大人気商品で、JAまつりが開催した2時間も経たないうちに完売します。昨年は出店していた中で最も速く完売しました。毎年早めに芋餅が完売する事から、ある盟友が「完売した後の時間がもったいない、何か売ろう」と持ち掛けられました。協議の結果、綿あめの実演販売を3年前から手掛ける様になりました。当初は、「真冬に綿あめ？大丈夫？売れる？」という心配な声もありましたが、販売を始めてみると意外や意外、子供達の長蛇の列となりJAまつりが終了する時間まで、途切れることがありませんでした。現在では、青壮年部が出店している「芋餅」と「綿あめ」がJAまつりの看板商品となりつつあります。当初は芋餅なんてやめて別な目玉商品を…と書いていましたが、「兄ちゃん、今年の芋餅は旨かったや！来年も頼むろ」と実際に買って声をかけてくれるお客さんの笑顔を見ると改めて伝統の芋餅を作り続けてきて良かったと感じています。また、自分達の体力にあわせて、皆で知恵を出し合い新しい事に挑戦し成功する事の喜びを積み重ねて行く事が組織の強化に繋がっていくのではないのでしょうか。

・・・続きは12月号にて

